

〔学術論文〕

近代アメリカ黒人成人教育史研究の課題

- タスキーギ学院研究の今日的意義 -

Issues in the Historical Study of Modern Adult Education for African Americans: The Contemporary Significance of Tuskegee Institute Study

成 玖 美¹

SUNG, Koomi

要旨：本稿の目的は、近代アメリカ合衆国における黒人成人教育史研究、とりわけタスキーギ学院研究の今日的意義と課題を確認することにある。アメリカ黒人成人教育史研究によって、同時代の世界史的視点を含みつつ、アメリカ成人教育史を再解釈する課題が残されている。遅れて近代化したアメリカ南部黒人への注目は、日本における従来のアメリカ成人教育史研究における「自由な市民」像や都市型成人教育像を問い直すことになろう。また、成人教育の制度化がはらむ矛盾に着目しながら、その歴史的な性格を把握する姿勢が求められる。

キーワード：アメリカ黒人、成人教育史、タスキーギ学院、ブッカー・T・ワシントン

1. 研究の背景

1) 黒人成人教育実践の「発見」

本稿の目的は、筆者がこれまで取組んできた近代アメリカ合衆国（以下、アメリカ）における黒人成人教育史研究、とりわけタスキーギ学院における拡張事業を中心とした黒人教育研究に関して、その今日的意義と課題を確認することにある。²

アメリカ成人教育の歴史的な性格は、「自由」「多様性」「実用性」の希求と実現に見出されるといわれる。新大陸に渡った進取性と宗教心に富む人々による、自発的な自己改善および社会改善欲求、それこそがアメリカ成人教育の展開を支えた原動力であり、本質であるというのが、比較成人教育研究における通説である。こうした特徴は日本において、近代化を推し進める政府の教化策として発展した日本の社会教育の歴史的な性格と際立った対比性をもって、語られてきた。

しかしこうしたアメリカ成人教育像に、人種・民族的少数者の存在や学習活動の蓄積は、どれほど反映されていたであろうか。第一次世界大戦後のアメリカ化運動を唯一の例外として、アメ

リカ成人教育史は暗黙裡のうちに白人主流住民を行為者として想定しており、人種や民族間の社会的軋轢に注目した研究は遅れたといつてよい。

そんな中、ニューフェルド（H. G. Newfeldt）とマックギー（Leo McGee）による『アメリカ黒人の成人教育 Education of the African American Adult（1990）』³は、アメリカ黒人の成人教育史をまとめた画期的著作となった。彼らは、日本におけるアメリカ成人教育研究の基本書ともなってきたノールズ（Malcolm S. Knowles）のアメリカ成人教育史研究⁴に言及し、その中に黒人に関する事項が極端に少ないことを指摘して、黒人の成人教育実践の軽視を批判した。⁵ それまで等閑視されていた黒人の教育・学習活動史は、成人教育研究のあらたな対象として「発見」され、アメリカ成人教育史に新たな文脈を付け加えることとなったのである。

しかし彼らの研究は、黒人という新たな登場人物を加えることで従来のアメリカ成人教育史に厚みを増すことには成功したものの、そうした黒人成人教育史の発掘によって従来のアメリカ成人教育史像がいかに読み替えられ、再解釈されるのかという点については、明確な見解を示していない。換言すれば、アメリカ成人教育のメインストリームとの対照において、さらにはその時代の世界史的視点を含みつつ、アメリカ黒人成人教育の歴史的性格を検討する課題が、残されているのである。

2）近代黒人成人史研究の現代的意義

黒人成人教育実践の「発見」という事態が、1960年代公民権運動以来のエスニック研究隆盛の流れを汲むものであることはいうまでもない。とくに80年代以降、アメリカ公教育改革のキーワードとして「多文化教育multicultural education」論が登場し、世界的にもエスニック・マイノリティの人権尊重の視点に立った教育のあり方について関心が高まり、現在まで賛否両論の議論が続いている。

こうした動きについて、アメリカ多文化教育の代表的研究者バンクス（James A. Banks）が「歴史的な観点から見ていくことが重要である」⁶と述べ、公民権運動以前の黒人教育への注目を促している点は、注目されてよい。彼は黒人によるエスニック研究運動の原点として、1880年代から1920～30年代までの黒人研究者による歴史研究や出版物の蓄積に着目した。⁷ 人種隔離政策が固定化されるこの時期は、エリート黒人研究者や運動家による革新的黒人解放運動の胎動が見られる時期である。その長い闘争の潮流が、第二次世界大戦後の公民権運動に結実したというのが、バンクスの歴史観である。

筆者は、バンクスの指摘に賛同しつつ、時代をよりさかのぼって、南北戦争以前の時代から1910年代までを対象として、その黒人成人教育実践の歴史を検証してきた。迂遠ではあるが、こうした歴史的視野をもつことが、今日的象を解釈するためにも有益であると考えたためである。

1974年刊行の国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第7巻 社会教育』の「総説」におい

て、吉田昇は近代欧米成人教育の歴史的 성격に関し、およそ以下のように述べている。すなわち、それは近代市民社会の成立を背景とした「自由な市民」による相互教育要求として発現し、やがて地方公共団体による援助・整備の進展と、一方で国家政府による統制介入という歴史的経過を経ながら、市民の自由な教育活動を守る運動として発展していく性格をもつのであるという。⁸

吉田の説明は欧米における近代成人教育の展開過程をすぐれて要約している。しかし、いま、それをアメリカ黒人史の文脈においたとき、ただちに疑問がわくことに気づく。アメリカ黒人は「自由な市民」であったのか、彼・彼女らに地方公共団体からの援助は提供されたのか、彼・彼女らの教育活動は国家政府の介入への抵抗として発展するのか、そもそも近代アメリカにおいて黒人たちはどのような成人教育活動をし得たのか。こうした疑問を念頭におきつつ、近代アメリカ黒人成人教育の歴史を検証する必要がある。

2. 近代黒人教育をよむ視点

1) 「解放民教育」の両義性

アメリカ黒人教育の歴史的な性格を問うとき、アメリカ史研究におけるひとつの争点となってきた「解放民教育」の評価をめぐる議論に触れておくことは、後の議論に有効であろう。

南北戦争とそれに続く南部再建の時代の評価は、アメリカ史研究者の間で議論的となってきた。南北戦争時、連邦軍（北軍）陣営に逃げ込んだり保護されたりした黒人たちに対しておこなわれた教育を「解放民教育」というが、そうした教育に当たるため、北部の慈善組織や宗教団体から派遣された多くの宗教家や教師が南部へ渡ったことは、よく知られている。北部勢力による南部再建の試みは、総体的には政治的妥協による失敗に終わったとされるが、一方、北部教師たちが南部に道を開いた解放民学校は、再建期に南部州政府の管轄に移されるなどして、南部公教育システムの基盤形成に寄与したとも評価されている。⁹

これまで多くの歴史研究者がこの歴史的事実を検証してきたが、北部団体や教師の評価には、大きな歴史観の相違が認められる。一般にアメリカ史研究の歴史観の転換については、以下のように理解されている。すなわち、19世紀末から20世紀はじめの時期に、南北戦争と再建に関して最初の体系的なおこなったダニング学派が、「南部旧奴隷主層の心情に共感を示して黒人を蔑視すると同時に、北部の再建勢力に批判的な立場をとったが、それは19世紀末から大量に流入する新移民を脅威と感じた主流白人たちが、再建期の黒人台頭に脅威を感じた南部白人の境遇に共通性を感じたためである」ともいわれる。¹⁰

一方、第二次世界大戦後、公民権運動への潮流のなかで、再建勢力を積極的に評価しようとする修正主義者／リビジョニストが隆盛する。この立場においては、解放民教育にあたった北部教師の献身ぶりや後に残した影響力は、積極的に評価される。ブラッシングム（John H.

Blassingame)¹⁾やW・アームストロング (Warren B. Armstrong)²⁾、フェン (Sing-nan Fen)³⁾らの研究において、北部勢力や北部教師は、南部黒人に教育をもたらし、教育による向上を信じた平等主義のヒューマニストとして、描かれている。

しかし1960年代後半には、「ポスト・リビジョニスト」ともいうべき研究動向が興る。その特徴は、北部再建勢力のイデオロギーを、きわめて保守的なものであったと批判する点に求められる。例えばブッチャー (Ronald E. Butchart) は、解放民学校は南部黒人を労働者階級に移行させようとする白人からの押し付けであったと批判する。¹⁴⁾ またモリス (Robert C. Morris) は解放民学校が実業学校としての性格を強くする過程に注目し、それが北部白人と南部白人の妥協の産物であったと指摘している。¹⁵⁾ 解放民教育を、黒人差別を助長する実践に終わったと断罪するこうした研究動向は、公民権運動後確立されていく批判的教育学派の系譜にも位置づけられよう。

2) 体制内統合派の歴史的評価

このように解放民教育については、研究者がもつ歴史観、ひいては研究者の政治的主義を反映して、評価が分かれてきた。こうした政治的主義による歴史評価という態度は、黒人史研究に限らず、エスニック集団研究や歴史研究全般に共通する傾向でもある。

しかし、いま黒人成人教育の歴史的性格を検討しようとする筆者の視点に立てば、解放民教育が南部黒人にとって善であったのか悪であったのかを結論づけることは、目的ではない。むしろ、そうした両義性こそが、近代教育の歴史的性格を言い当てており、その両義性を冷静に見据えることで、黒人成人教育の近代的性格が描き出されると考える。

現代の成人教育研究者ピーター・ジャービス (Peter Jarvis) は、成人教育史における「痛ましいパラドクス」について、次のように述べている。「成人教育の創始者たちは、時に対等な教育の枠組みの中で公益のために利他的に働いたが、彼らはまた、国家の認知を得ようと努力してきた。ところが、彼らが認知を獲得してしまうと成人教育は、国家が制御する教育者による形態へと変容する結果となったのである。」¹⁶⁾ 成人教育の制度化を目指す「リベラルな成人教育」が孕むこうしたパラドクスへの自覚は、成人教育史の政治学的読解において、重要な姿勢となる。

とくに筆者が注目してきた1895年から1915年までは「ブッカー・ワシントンの時代」とも呼ばれ、自助的生活改善と実業教育の普及を唱えた黒人指導者ブッカー・ワシントン (Booker T. Washington) が白人との政治的対立を忌避する戦略をとり、大きな影響力をもった時期である。しかし、後にデュボイス (W. E. B. DuBois) を代表とする黒人知識人や運動家により、白人への妥協的戦略に対する批判勢力が台頭し、やがてブッカー・ワシントンの死後、黒人解放運動は革新的方向へ傾倒し、「リベラルな」改良主義思想は乗り越えられていくこととなる。

多文化主義理念の普及した今日においては、こうした体制内改良主義的思想はもはや汲み取る

べき意義もなく、過去の汚点として見捨てられる傾向もある。しかしあえて今、革新的解放運動によって乗り越えられていく、体制内改良主義の教育観や教育実践に着目し、その歴史的意味を問いたい。改良主義的な成人教育実践は、近代国家の発展過程にあまねく発現する近代成人教育の典型でもある。そうした実践をアメリカ黒人教育の歴史的過程として措定し、検証しながら、その時代に生きた黒人知識人や大衆層が求めた教育像を読み取ることに、また、意義があると考えられるからである。

3. 先行研究の概観

1) 歴史研究者による黒人教育実践への関心

先に、成人教育史研究における黒人教育の視点の欠落を指摘したが、一方で、黒人史研究者たちは黒人の成人教育実践に早くから関心を寄せてきた。とくに黒人研究者自身による研究は長年にわたって蓄積されている。¹⁷ 多くの場合、黒人史研究者たちはアメリカ史における黒人の存在価値を示そうとする明確な意図をもっており、黒人たちが取り組んださまざまな教育・学習活動は、社会的地位向上へ向けた重要な歴史的要素として認識されてきたのである。こうした研究蓄積は、歴史家による成人教育史研究の先駆的着手として、評価できよう。

概観すれば、1930年以前から、進歩主義の時代精神の中で、ウッドソン (Carter G. Woodson)⁸、デュボイス¹⁹らが、教育環境の向上を軸にして黒人の社会的向上の達成を研究し始めている。続く1930年代以降には、大恐慌やマルクス主義の影響を受け、デュボイスらによる、階級と差別の視点からの黒人史研究がすすむこととなる。²⁰ また同時代に、ボンド (Horace Mann Bond) は学校による権力構造の再生産を指摘している。²¹ このように黒人史研究者の間には、批判的教育学の視点がすでに1930年代に取り込まれていたともいえよう。

1940年代から60年代までは、J・H・フランクリン (John Hope Franklin)²²やウッドワード (C. Vann Woodward)²³などによる、人種隔離の否定的影響を強調する黒人史研究が蓄積されていく。こうした研究は、公民権運動を支える歴史観として、世界的に広く受容されていくこととなる。また60年代のクォールズ (Benjamin Quarles) による概説的黒人史²⁴では、アメリカの発展に黒人が果たした積極的役割が強調されている。

一方、アメリカ史の研究方法論に関する議論が沸騰する1970年代以降には、黒人の社会史研究が着手されていく。中でもV・フランクリン (Vincent P. Franklin) やアンダーソン (James D. Anderson)²⁵らは、黒人自身の自助的教育努力の歴史に注目し、黒人大衆の視点からの歴史の読み替えに踏み出した。

2) ブッカー・ワシントンの人物評価をめぐって

ブッカー・ワシントンに関しても、歴史研究者による膨大な研究が蓄積されてきた。そのほとんどは、アメリカ黒人社会に対するワシントンの功罪を評価するものである。20世紀前半において、ワシントンはデュボイスと比較され、白人妥協主義者としてのワシントン像が強調されてきた。

やがて1950年代後半から60年代前半にかけての研究において、従来の単純なワシントン評価を越え、ワシントンの多面的な姿が明らかにされる。代表的なものとして、マイヤー（August Meier）による研究は、ワシントンが秘密裏に反差別運動を支援していた事実を指摘し、ワシントンの「差別への適応の論理」だけでなく、「被差別者自身の自助思想の実践的側面」への注目を促した。²⁶ さらに1970年代に入ると、ハーラン（Louis R. Harlan）がブッカー・ワシントンの膨大な私的文書を史料として詳細な伝記研究をおこない、多面的なワシントンの顔を描いて、単なる妥協の人ではない、「行動の人」としてのワシントン像を提示した。²⁷

またノレル（Robert J. Norrell）は、当時のタスキーギの町の人種関係を詳細に描きながら、ワシントンが育成した中流階級黒人たちが後に獲得した社会的地位を評価し、「ワシントンの哲学は、少なくともその誕生の地において、正当性を立証した」と、ワシントンを肯定的に評価した。²⁸ 日本においても、80年代後半から90年代にかけて、川島正樹がワシントンを、南部黒人の「現実的利益の確保と自立の実現に努め」た「誠実な「妥協者」」であったと表現し、²⁹ 杉淵忠基もワシントンが生きた時代の過酷さを描写した上で「生きていた時代に制約されながらも、その役目を果たして一生を終えた」と書くなど、ワシントンの再評価がなされている。³⁰

一方、21世紀に入り、ワシントンの講演や著作による言説分析という、新たな研究動向が見られる。ウェスト（Michael Rudolph West）は、ワシントンの言説は、黒人が目指すべき進歩を「人種関係」における改善であると認識させることによって、人種主義者による黒人の公権剥奪という事実がありながらもアメリカは民主主義の国であり得ると信じさせる、イデオロギー調停案として作動したと批判する。³¹ さらに兼子歩は、ワシントンが信じたカラーブラインドなアメリカという理想に基づく言説には反白人至上主義という積極性があったものの、同時に人種帰属意識に基づく政治行動を否定したため、ジェンダーや階級の矛盾を相対化し得る草の根の黒人コミュニティの政治活動を抑圧する結果になったと分析している。³²

近年のこうしたワシントンに対する新しい視点からの再評価は重要である。ただし、これらの研究は、ワシントンの政治的活動や、その言説を中心になされており、ワシントンがタスキーギ学院の学長であり教育実践者であるという側面への注目が弱い。教育実践者としてのワシントン、およびタスキーギ学院の実像を知ることによって、ワシントン像はより鮮明になるはずである。

3) 成人教育研究者によるタスキーギ学院研究

また成人教育研究者によっても、ブッカー・ワシントンは新たな光を当てられている。1994年に出版されたスタブルフィールド (Harold W. Stubblefield) とキーン (Patrick Keane) による『アメリカ成人教育史』は、マイノリティを含めたアメリカ成人教育歴史像の再構成をおこなっているが、その中で連邦農務省の協同拡張事業につながるタスキーギ学院の拡張事業や、黒人指導者としてのワシントンについて言及している。³³

タスキーギ学院を主たる対象とする成人教育研究も増えている。ジェームス (Felix James) は「皮肉なことに、今日支持されている成人教育の原則の多くは、1800年代の終わりにワシントンとカーバーによって採用されているものである」とし、現代アメリカ成人教育の方法論がすでにブッカー・ワシントンらによって実践されていたと評価する。³⁴ デントン (Virginia Lantz Denton) もまた、「1800年代末のワシントンの哲学と実践は、成人教育の現代的実践と驚くほど調和している」と指摘するとともに、拡張教育事業によるコミュニティ教育の先駆性を評価している。³⁵ こうしたブッカー・ワシントン実践のプラグマティックな観点からの評価は、現代のアメリカ成人教育研究界の性格を反映しているようにも思われる。また、マーシャ・ジョーンズ (Martha Small Jones) も、地域に根ざす成人教育実践としてタスキーギ学院の拡張教育カリキュラムを評価している。³⁶

しかし、これらの研究には、ブッカー・ワシントンの教育実践を近代アメリカ成人教育史の文脈で理解しようとする意図は見られない。南北戦争以前にまでさかのぼって黒人成人教育史を検証し、その連続性のもとにブッカー・ワシントンの時代を解釈することによって、ワシントンの教育実践の歴史的立場がより明確になると思われる。

4. 比較社会教育史としての意義

最後に、アメリカ黒人成人教育史研究が、日本における比較社会教育史研究の蓄積に与える意義について指摘したい。

1) アメリカ南部農村の遅れた「近代化」

日本における従来のアメリカ成人教育研究では、(他分野のアメリカ研究にもその傾向が見られるが) 概して北部または西部地域を取り上げるものが多かった。歴史研究においては合衆国発祥の地であるニューイングランド地域への注目が圧倒的であり、また今日の状況に関しては、多民族化が著しいカリフォルニア州など西部にも注目が集まっている。

一方南部は、歴史的にも北部や西部とは異なる伝統をもち、また現在でも人種構成などにおいて他地域とは異なる特徴をもつ。19世紀半ば以降まで奴隷制度を敷き、アメリカ国内において遅

れて工業化がすすみ、また公立学校制度の普及も南北戦争以後に本格化したアメリカ南部への注目、北部中心で構成されてきたアメリカ研究に、地政学的見地から異議を唱える性格をもつ。近年、歴史学分野では、人種・階級・ジェンダーの多様性と葛藤を読み解くアメリカ南部史研究が盛んである。

従来、「欧米の社会教育が都市を中心として起っているのに反し近代日本の社会教育が農村を中心として発達してきたということ」³⁷が、日本社会教育の歴史的特質として把握されてきた。しかし南部黒人の多くは農村で農業に従事する人々であり、その性格は、多分に農村型社会教育の様相を呈している。

また、先述のように、従来のアメリカ成人教育史理解では、そのアメリカ的伝統はしばしば「自由な市民の知識普及グループによる相互教育」であるとみなされてきた。しかし南北戦争以前まで教育を禁止されていた南部の奴隷黒人には、そうした蓄積など存在しない。多くの南部黒人にとっては、1860年代の南北戦争中から取り組まれた解放民教育が、はじめての教育経験であった。そしてその時期は、日本の明治の幕開けの時期とさほど変わらない。解放民教育においては南部黒人の生活と精神的「近代化」が目指されたが、それは日本政府が民衆の「近代化」を推し進めた時期と、ほぼ同時代であった。

さらに、アメリカにおいても日本においても、1910～20年代が社会（成人）教育の制度的整備期として位置づけられているが、遅れて始まったアメリカ南部黒人の教育は、政府による成人教育の制度化の動きと連動して発展し、政府の教育政策からの直接的な影響を反映している。実際、南部黒人の成人教育史には、政府主導の教化政策であったと評される日本の近代社会教育との類似性がみられる。

2) 実業教育振興の世界史的文脈

また、ワシントンが奨励し、タスキーギ学院で具体化された黒人実業教育は、南部黒人教育モデルとして南部に広く普及したが、北部黒人指導者らは、それを黒人の階級を固定化するものであるとして、強く批判した。政治思想的観点から見た場合、実業教育振興にそうした限界があることは否定できない。

しかし、社会教育史の文脈に沿えば、国富増大の目的のもと、近代社会教育の展開において実業教育が重視されるという傾向は普遍的に見られるものである。たとえば日本では、近代社会教育の性格を問う事例として、実業補習学校がしばしば取り上げられてきた。実業補習学校は国富の増大という国家目的のもと、小学校義務教育を修了した者を受け入れる補習組織として制度化されたが、その性格評価に関しては、論者によって幅がある。不破和彦の整理³⁸によれば、

「教育機会均等の要求をすりかえる形で社会教育が学校教育の代位の役割を果たした」という評価³⁹、
地方改良運動との関連で「地域における通俗教育を学校教育の体系に取り込み、小学校教育に

接続させた国民教化」を意図したという評価⁴⁰、そして、これらの点を認めつつも、実業補習学校が「労働と教育の結合」を実現する可能性を秘めていたなど、否定的なものに内在する肯定的契機を剔出する評価⁴¹、などがある。

では、南部黒人にとって実業教育振興はどのような意味をもったのか。当時の黒人の社会的平等をめぐるイデオロギー対立議論という狭い枠組みではなく、比較社会教育史の視点から、「近代化と実業教育振興」という文脈においてその歴史的な性格を問う姿勢が求められるであろう。

3) 成人教育の制度化がはらむ矛盾

かつて小川利夫は、社会教育研究の対象とは「社会教育行政(活動)」と「国民の自己教育運動」との「矛盾」の、歴史的・現実的解明にあると述べた。⁴² アメリカ黒人成人教育史研究においても、アメリカ黒人の自発的な学習運動への着目と、そうした動きを取り込みながら制度化されていく成人教育制度への着目の両方の視点が重要である。アメリカ黒人の自己教育要求が制度化される過程には「矛盾」が生じる。学習環境の充実を求める民衆の運動が制度化によって実現をみる一方、そうした制度化は政府側の思惑によって制御されるため、民衆の本来の要求と矛盾する結果を生むことにもなるのである。

しかし、そうした矛盾にもかかわらず、成人教育の制度化は黒人民衆の同意をとりつけながら実現していく。確かに、制度化への抵抗運動は存在したが、筆者が対象とする1910年代までに限って言えば、そうした動きは大勢ではなかった。そしてそうした事情の背景には、公権力 vs. 民衆という構図だけでは説明できない、二重三重の矛盾構造が存在した。それはたとえば、アメリカ民衆の中に存在する白人 vs. 黒人の人種対立、北部 vs. 南部という地域対立、黒人の中にも存在する中産・知識人階級 vs. 労働者階級という階級対立、男性 vs. 女性というジェンダー対立などの矛盾・葛藤である。

社会の主流へ参加したいという熱望をマジョリティ集団によって阻まれるマイノリティにとって、政府機関による教育の制度化は、機会均等を実現する唯一の方策とも感じられる。マイノリティの視角から成人教育の矛盾を読み取る作業には、マイノリティを取り囲む社会関係の把握とともに、こうしたマイノリティの内面に存在する葛藤への着目も、必要となろう。

4) 「国民化」と「周辺化」作用

最後に、近代は、国民創造の時代であったともいわれる。多様な文化的背景をもつ民族集団が、国民国家という「想像の共同体」(ベネディクト・アンダーソン)をつくりあげていく過程は、社会科学分野において批判されてきた。そしてその過程において重要な機能を果たしたのが「国民教育」であったという指摘が、広く受容されている。

学校教育と並び社会教育もまた、こうした「国民教育」としての性格を帯び発展してきた。社

会教育は、マイノリティを「国民」として編成していく過程に与し、人間の多様性を切捨て、画一的文化の創造と強要作用を果たしたといえる。

しかし一方では、国家を牽引するエリート養成の役割を担う学校教育とは異なり、社会教育はそもそも主に貧民・農民・労働者の子どもや大人を対象とするものであり、教育の複線化機能を担っていた。したがって、その対象にはマイノリティ住民が多く含まれていたものであり、社会教育にはマイノリティを周辺化し、その強化・固定化作用を果たすという側面もあったといえよう。

以上、まとめると、南部黒人の成人教育史研究によって、近代アメリカ成人教育の美点として受け入れられてきた「自由な市民」像や都市型成人教育像を問い直し、アメリカ成人教育史理解に新たな視角を与えることが期待される。その際にはアメリカ黒人をめぐる矛盾と葛藤および成人（社会）教育がはらむ「国民化」と「周辺化」作用の問題を重ね合わせながら、その歴史的性格を把握していく姿勢が求められる。

-
1. 名古屋市立大学大学院 人間文化研究科 准教授
 2. アメリカ合衆国に居住するアフリカ系住民の呼称については、政治的に正しいとされる「アフリカン・アメリカン African American」を用いるべきではあるが、本研究が対象とする時代においてその呼称が用いられておらず混乱が生じうること、および文章表記の簡便化のために、以下、「アメリカ黒人」あるいは単に「黒人」と表記する。
 3. Harvey G. Newfeldt & Leo McGee eds., *Education of the African American Adult: An Historical Overview*, Greenwood Press, 1990.
 4. Malcom S. Knowles 『アメリカの社会教育 - 歴史的展開と現代の動向』 [The Adult Education Movement in the United States, Holt, Rinehart and Winston, 1962.] 岸本幸次郎訳, 全日本社会教育連合会, 1975.
 5. 編者らが指摘する通り、ノールズが『アメリカの社会教育』において触れている黒人関係の事項は、南北戦争後に解放奴隷問題があったということと、20世紀前半の「有色人種の地位向上のための全国団体」と「都市同盟」という黒人解放団体が活動したという、ごく短い言及のみである。 Knowles, 前掲書、p.81. および p.85. 参照。
 6. James A. Banks, "Multicultural Education: Historical Development, Dimensions, and Practice" < James A. Banks & Cherry A. McGee Banks (eds.), *Handbook of Research on Multicultural Education*, Macmillan, 1995. > p.5.
 7. *ibid.*, pp.5-9.
 8. 吉田昇「総説」国立教育研究所編『日本近代教育百年史 第7巻 社会教育』(財)教育研究振興会、1974.
 9. 住岡敏弘「アメリカ南部における黒人公教育の形成過程 - 南北戦争後の北部博愛主義団体の黒人公教育間を中心として」『広島大学教育学部紀要第一部(教育学)』第45号、1996.
 10. 辻内鏡人『アメリカの奴隷制と自由主義』東京大学出版会、1997、pp.8-9.
 11. John W. Blassingame, "The Union Army as an Educational Institution for Negroes, 1862-1865", *Journal of Negro Education*, vol.34, no.2, 1965.
 12. Warren B. Armstrong, "Union Chaplains and the Education of the Freedmen", *Journal of Negro History*, vol.52, April, 1967.
 13. Sing-nan Fen, *Notes on the Education of Negroes in North Carolina During the Civil War*,

- Journal of Negro Education, vol.36, no.1, 1967.
14. Ronald E. Butchart, Northern Schools, Southern Blacks, and Reconstruction: Freedmen's Education, 1862-1875, Greenwood Press, 1980./ Ronald E. Butchart, "Schooling for a Freed People: The Education of Adult Freedmen, 1861-1871", <Newfeldt and McGee eds., op. cit.>
 15. Robert C. Morris, Reading, Writing and Reconstruction: the Education of Freedmen in the South, 1861-1870, University of Chicago Press, 1981.
 16. Peter Jarvis 『国家・市民社会と成人教育 - 生涯学習の政治学に向けて』 [Adult Education and the State: Toward a Politics of Adult Education, Routledge, 1993] 黒沢惟昭・永井健夫監訳、明石書店、2001、p.58.
 17. Vincent P. Franklin, "Introduction Essay: Changing Historical Perspectives on Afro-American Life and Education", Vincent P. Franklin & James D. Anderson eds., New Perspectives on Black Educational History, G. K. Hall & Co., 1978. に整理されている。
 18. Carter G. Woodson, The Education of the Negro Prior to 1861: A History of the Education of the Colored People of the United States from the Beginning of Slavery to the Civil War, The Associated Publishers, Inc., 1919.
 19. W.E.B DuBois, The Philadelphia Negro: A Social Study, Benjamin Blom inc., 1899.
 20. W.E.B DuBois, "Education and Work," The Journal of Negro Education, vol.1, 1932.
 21. Horace Mann Bond, Negro Education in Alabama, A Study in Cotton and Steel, The Associated Publishers, Inc., 1939.
 22. John Hope Franklin 『アメリカ黒人の歴史 - 奴隷から自由へ - 』 [From Slavery to Freedom: A History of Negro Americans, A. A. Knopf, 1947] 井手義光・木内信敬・猿谷要・中川文雄訳、研究社出版、1978など。
 23. C. Vann Woodward 『アメリカ人種差別の歴史』 [The Strange Career of Jim Crow, Oxford University Press, 1957] 清水博・長田豊臣・有賀貞訳、福村出版、1977.
 24. Benjamin Quarles 『アメリカ黒人の歴史』 [The Negro in the Making of America, Collier Books, 1964] 明石紀雄・岩本裕子・落合明子訳、明石書店、1994.
 25. Vincent P. Franklin and James D. Anderson, New Perspectives on Black Educational History, G.K.Hall and Company, 1978.
 26. August Meier, Negro Thought in America, 1880-1915, The University of Michigan, 1963.
 27. Louis R. Harlan, Booker T. Washington: the Wizard of Tuskegee, 1901-1915, Oxford University Press, 1983.
 28. Robert J. Norrell, Reaping the Whirlwind: The Civil Rights Movement in Tuskegee, Random House, 1985, p. .
 29. 川島正樹 「「アトランタ妥協」の再検討 - タスキーギ校をめぐるブッカー・T・ワシントンの黒人「自助」の展開 - 」『西洋史学』 vol.154, 1989, p.31.他に、同「ブッカー・T・ワシントンにおける「自助」と「連帯」 - 米西戦争・フィリピン「反乱」をめぐる」『史苑』第44巻2号、1985.
 30. 杉淵忠基 「ブッカー・T・ワシントンと「奴隷制よりもひどい時代」」『亜細亜大学教養部紀要』 vol.60, 1999. / 同「ブッカー・T・ワシントンとその時代 - 南部再建時代およびそれ以降の黒人教育と人種差別 - 」『亜細亜大学教養部紀要』 vol.58, 1998.
 31. Michael Rudolph West, The Education of Booker T. Washington: American Democracy and the Idea of Race Relations, Columbia University Press, 2006.
 32. 兼子歩 「ブッカー・T・ワシントンの政治的権利論における人種・階級・ジェンダー」『北大史学』 vol. 48, 2008.
 33. Harold W. Stubblefield and Patrick Keane 『アメリカ成人教育史』 [Adult Education in the American Experience: From the Colonial Period to the Present, John Wiley & Sons, Inc., 1994], 小池源吾・藤村好美監訳、明石書店、2007.
 34. Felix James, "Booker T. Washington and George Washington Carver: A Tandem of Adult Educators at Tuskegee", <Newfeldt & McGee eds., op. cit. >

近代アメリカ黒人成人教育史研究の課題（成）

- 35 . Virginia Lantz Denton, Booker T. Washington and the Adult Education Movement, University Press of Florida, 1993.
- 36 . Martha Small Jones, Booker T. Washington's Tuskegee Curriculum: Community-Based Adult Education for Adults in Rural Alabama, a thesis submitted to the Graduate Faculty of North Carolina State University in partial fulfillment of the requirements for the Degree of Doctorate of Education, 2001.
- 37 . 吉田昇 op. cit. p.16.
- 38 . 不破和彦 『近代日本の国家と青年教育』 国土社、1990.
- 39 . 小川利夫・倉内史郎共編 『社会教育講義』 明治図書、1964 .
- 40 . 大江志乃夫 『国民教育と軍隊』 新日本出版社、1974.
- 41 . 宮坂広作 『近代日本社会教育政策史』 国土社、1966.
- 42 . 小林利夫 「社会教育の組織と体制」 小川・倉内編、op. cit.